

# 204

現場で求められる「臨床検査技師」を育てるには

関西医療大学 保健医療学部 臨床検査学科  
○上田 一仁

【はじめに】この春から、35年以上働いてきた臨床の現場を離れ、「臨床検査技師」を育てる教育機関に転職した。これまで、非常勤講師として学生教育に携わったことはあるが、専任教員として入学から就職まで責任を持って関わっていかなければならないことに、期待と不安を持っての転職だった。この5ヶ月間、右も左も分からない状況で「臨床検査技師」教育に携わってきて感じたことについて報告する。

【情報】年度途中での採用であったためか、種々の情報が提供されず、突然○月○日に必修の研修会がありますので必ず出席してくださいといった情報が届く。学生向けに講義・試験予定や休講情報などのポータルサイトがあると聞く。職員に対する情報もweb上で管理できないものかと感じる。

【設備】いわゆる「大学」での教育用に必要な分析機器・設備が少ない。臨床の現場へ学生たちを旅立たせるには何とも貧弱な状況である。本学が元々「臨床検査技師」を育てるための大学ではなかったことも原因のひとつかもしれないが、免疫や臨床化学の自動分析装置を見たこと・触れたことがない状態で臨地実習に送り出すのは辛く、改善が望まれる。

【研究】採用時に学位を取得しているという理由で大学院の教員としても登録された。しかし、上記同様、研究用に使用できる機器は存在せず、十分な大学院教育が行えない。ステップを踏みながら予算要求などを行わないといけないのだが、なかなか全貌を把握できず戸惑っているのが現状である。

【学生】臨床検査学科に限らず、本学の学生は素晴らしい。大部分の学生が廊下や道ですれ違う際にきちんと挨拶をされる。医療従事者は「知識」と「技術」の習得だけでなく、「人柄」も重要な資質である。昨今、検体採取や検査説明など患者様と接する機会も増えてきている。「人柄」の教育は難しいかもしれないが、大学全体が明るく応対の出来る風潮であれば自然と身についてくるのではないだろうか。

【希望】ランニングコストの問題はクリアしないとイケないが、臨床の現場で使用されている自動分析装置の導入が望まれる。一方で大学院での研究用にコアとなる分析機器の設置も重要課題である。加えて私も含めて教員のレベルを向上させ、魅力ある環境を整備することで、現場で求められる臨床検査技師を輩出できる大学になるのではないかと考える。